

# 晚菊

林芙美子

青空文庫



夕方、五時頃うかがいますと云う電話があつたので、きんは、一年ぶりにねえ、まア、そんなものですかと云つた心持ちで、電話を離れて時計を見ると、まだ五時には二時間ばかり間がある。まずその間に、何よりも風呂へ行っておかなければならないと、女中に早目な、夕食の用意をさせておいて、きんは急いで風呂へ行つた。別れたあの時よりも若やいでいなければならぬ。けつして自分の老いを感じさせては敗北だと、きんはゆつくりと湯にはいり、帰つて来るなり、冷蔵庫の氷を出して、こまかくくだったのを、二重になつたガーゼに包んで、鏡の前で十分ばかりもまんべんなく氷で顔をマツサアジした。皮膚の感覚がなくなるほど、

顔が赧くしびれて来た。五十六歳と云う女の年齢が胸の中で牙を  
むいているけれども、きんは女の年なんか、長年の修業でどうに  
でもごまかしてみせると云ったきびしきで、取っておきのハクラ  
イのクリームで冷い顔を拭いた。鏡の中には死人のように蒼ずん  
だ女の老けた顔が大きく眼をみはっている。化粧の途中でふつと  
自分の顔に厭気がさして来たが、昔はエハガキにもなったあでや  
かな美しい自分の姿が瞼に浮び、きんは膝をまくって、太股の  
肌をみつめた。むつくりと昔のように盛りあがった肥りかたでは  
なく、細い静脈の毛管が浮き立っている。只、そう痩せてもいな  
いと云うことが心やすめにはなる。ぴつちりと太股が合っている。  
風呂では、きんは、きまつて、きちんと坐った太股の窪みへ湯を

そそぎこんでみるのであつた。湯は、太股の溝へじつと溜つてい  
る。吻ほつとしたやすらぎがきんの老いを慰めてくれた。まだ、男  
は出来る。それだけが人生の力頼みのような気がした。きんは、  
股またを開いて、そつと、内股の肌を人ごとのようになでてみる。す  
べすべとして油になじんだ鹿皮のような柔らかさがある。西鶴の  
「諸国を見しるは伊勢物語」のなかに、伊勢の見物のなかに、三  
味やみを弾ひくおすぎ、たま、と云う二人の美しい女がいて、三味を弾  
き鳴らす女の前に、真紅の網を張りめぐらせて、その網の目から  
二人の女の貌かおをねらつては銭を投げる遊びがあつたと云うのを、  
きんは思い出して、紅の網を張つたと云う、その錦にしきえ絵のような  
美しさが、いまの自分にはもう遠い過去の事になり果てたような

気がしてならなかった。若い頃は骨身に沁<sup>し</sup>みて金慾に目が暮れていたものだけれども、年を取るにつれて、しかも、ひどい戦争の波をくぐり抜けてみると、きんは、男のない生活は空虚で頼りない気がしてならない。年齢によつて、自分の美しさも少しずつは変化して来ていたし、その年々で自分の美しさの風格が違つて来ていた。きんは年を取るにしたがつて派手なものを身につける愚はしなかつた。五十を過ぎた分別のある女が、薄い胸に首飾りをしてみたり、湯もじにでもいいような赤い格子<sup>こうしじま</sup>縞のスカートをはいて、白サティンの大だぶだぶのブラウスを着て、つば広の帽子で額の皺<sup>しわ</sup>を隠すような妙な小細工はきんはきらいだった。それかと云つて、着物の襟<sup>えり</sup>裏<sup>うら</sup>から紅色をのぞかせるような女郎のよ

うないやらしい好みもきらいであった。

きんは、洋服はこの時代になるまで一度も着た事はない。すつきりとした真白い縮ちりめん緬の襟に、藍大島のあいおおしま紺の衿、帯は薄いくりーム色の白筋博多。水色の帯揚げは絶対に胸元にみせない事。たつぷりとした胸のふくらみをつくり、腰は細く、地腹は伊達巻だてまきで締めるだけ締めて、お尻にはうつつりと真綿をしのばせた腰こしぶ蒲団とんをあてて西洋の女の粋いきな着つけを自分で考え出していた。

髪の毛は、昔から茶色だったので、色の白い顔には、その髪の毛が五十を過ぎた女の髪とも思われなかった。大柄なので、裾すそみじかに着物を着るせいか、裾もとがきりつとして、さっぱりしていた。男に逢あう前は、かならずこうした玄人くろうとっぽい地味なつくり

かたをして、鏡の前で、冷酒ひやざけを五勺しやくほどきゆうとあおる。そのあとは歯みがきで歯を磨みがき、酒臭い息を殺しておく事もぬかりはない。ほんの少量の酒は、どんな化粧品をつかったよりもきんの肉体には効果があつた。薄つすりと酔いが発あけると、眼もとが紅あかく染まり、大きい眼がうるんで来る。蒼あおつぽい化粧をして、リソリンでといたクリームでおさえた顔の艶つやが、息を吹きかえしたようにさえぎえして来る。紅だけは上等のダークを濃く塗つておく。紅いものと云えば唇くちびるだけである。きんは、爪を染めると云う事も生しょうがい涯がいした事がない。老年になつてからの手はなおさら、そうした化粧はものほしげで貧弱でおかしいのである。乳液でまんべんなく手の甲を叩たたいておくだけで、爪は癩かんしょう性しょうなほど短く剪きつ

て羅紗らしやの裂きれで磨みがいて置く。長襦袢ながじゆばんの袖口そでぐちにかいま見える色彩は、すべて淡い色あいを好み、水色と桃色のぼかしたたづななぞを身につけていた。香水は甘つたるい匂においを、肩とぼつてりした二の腕にこすりつけておく。耳みみたぶ朶たぶなぞへは間違つてもつけるよ  
うな事はしないのである。きんは女である事を忘れたくないのだ。世間の老婆の薄汚なさになるのならば死んだ方がましなのである。——人の身にあるまじきまでたわわなる、薔薇ばらと思えどわが心地する。きんは有名な女の歌つたと云うこの歌が好きであつた。男から離れてしまった生活は考えてもぞつとする。板谷の持つて来た、薔薇の薄いピンクの花びらを見ていると、その花の豪華さ  
きんは昔を夢見る。遠い昔の風俗や自分の趣味や快樂が少しずつ

変化して来ている事もきんには愉たのしかった。一人寝の折、きんは真夜中に眼が覚めると、娘時代からの男の数を指でひそかに折り数えてみた。あのひととあのひと、それにあのひと、ああ、あのひともある……でも、あのひとは、あのひとよりも先に逢つていたのかしら……それとも、後だったかしら……きんは、まるで数え歌のように、男の思い出に心が煙たくむせて来る。思い出す男の別れ方によつて涙の出て来るような人もあつた。きんは一人一人の男に就ついては、出逢いの時のみを考えるのが好きであつた。以前読んだ事のある伊勢物語風に、昔男ありけりと云う思い出をいっぱい心に溜ためているせいか、きんは一人寝の寝床のなかで、うつらうつらと昔の男の事を考えるのは愉しみであつた。——田

部からの電話はきんにとつては思いがけなかったし、上等の葡萄酒ぶどうにでもお眼にかかったような気がした。田部は、思い出に吊つられて来るだけだ。昔のなごりが少しは残っているであろうかと云った感傷で、恋の焼跡を吟味しに来るようなものなのだ。草茫ぼうぼう々の瓦礫がれきの跡に立つて、只、ああと溜息ためいきだけをつかせてはならないのだ。年齢や環境に聊いささかの貧しさもあつてはならないのだ。慎み深い表情が何よりであり、雰囲ふんいき気は二人でしみじみと没頭出来るようなただよいでなくてはならない。自分の女は相変らず美しい女だったと云う後味のなごりを忘れさせてはならないのだ。きんはどこおりなく身支度が済むと、鏡の前に立つて自分の舞台姿をたしかめる。万事抜かりはないかと……。茶の間へ

行くと、もう、夕食の膳ぜんが出ている。薄い味噌汁みそしると、塩昆布しおこんぶに  
麦飯を女中と差し向いで食べると、あとは卵を破つて黄身をぐつ  
と飲んでおく。きんは男が尋ねて来ても、昔から自分の方で食事  
を出すと云うことはあまりしなかつた。こまごまと茶餉台ちやぶだいをつ  
くつて、手料理なんですよと並べたてて男に愛らしい女と思われ  
たいなぞとは露ほども考えないのである。家庭的な女と云う事は  
きんには何の興味もないのだ。結婚をしようなぞと思ひもしない  
男に、家庭的な女として媚こびてゆくいわれはないのだ。こうした  
きんに向つて来る男は、きんの為に、いろいろな土産物みやげものを持っ  
て来た。きんにとってはそれが当り前なのである。きんは金のな  
い男を相手にするような事はけつしてしなかつた。金のない男ほ

ど魅力のないものはない。恋をする男が、ブラッシュもかけない洋服を着たり、肌着の釦ボタンのはずれたのなぞ平気で着ているような男はふつと厭になつてしまう。恋をする、その事自体が、きんには一つ一つ芸術品を造り出すような気がした。きんは娘時代に赤坂の万まんりゆう竜りゆうに似ていると云われた。人妻になつた万竜を一度見掛けた事があつたが、惚ほれぼれ々々とするような美しい女であつた。きんはその見事な美しさに唸うなつてしまった。女が何時いつまでも美しさを保つと云う事は、金がなくてはどうにもならない事なのだと悟つた。きんが芸者になつたのは、十九の時であつた。大した芸事も身につけてはいなかつたが、只、美しいと云う事で芸者になり得た。その頃、仏蘭西人フランスで東洋見物に来ていたもうかなりな年齢

の紳士の座敷に呼ばれて、きんは紳士から日本のマルグリット・ゴオチエとして愛されるようになり、きん自身も、つばきひめ椿姫気取りでいた事もある。肉体的には案外つまらない人であつたが、きんには何となく忘れがたい人であつた。ミツシエルさんと云つてもう、仏蘭西の北の何処どこかで死んでいるに違いない年齢である。仏蘭西へ歸つたミツシエルから、オパールとこまかいダイヤを散りばめた腕環を贈つて来たが、それだけは戦争最中にも手放さなかつた。——きんの関係した男達は、みんなそれぞれに偉くなつていったが、この終戦後は、その男達のおおかたは消息も判わからなくなつてしまつた。相沢きんは相当の財産を溜め込んでいるだらうと云う風評であつたが、きんはかつて待まち合あいをしようとか、料

理屋をしようなどとは一度も考えた事がなかった。持っているものと云えば、焼けなかった自分の家と、熱海あたみに別荘を一軒持つているきりで、人の云うほどの金はなかった。別荘は義妹の名前になつていたので、終戦後、折を見て手放してしまった。全くの無為徒食であつたが、女中のきぬは義妹の世話であつたが唾おしの女である。きんは、暮しも案外つましくしていた。映画や芝居を見たいと云う気もなかつたし、きんは何の目的もなくうろろと外出する事はきらいであつた。天日にさらされた時の自分の老いを目に見られるのは厭であつた。明るい太陽の下では、老年の女のみじめさをようしやなく見せつけられる。如何なる金のかつた服飾も天日の前では何の役にもたたない。陽蔭ひかげの花で暮す事に

満足であつたし、きんは趣味として小説本を読む事が好きであつた。養女を貰つて老後の愉しみを考えてはと云われる事があつても、きんは老後なぞと云う思いが不快であつたし、今日まで孤独で来た事も、きんには一つの理由があるのだつた。——きんは両親がなかつた。秋田の本庄ほんじょう近くの小砂川こさかわの生れだと云う事だけが記憶にあつて、五ツ位の時に東京に貰われて、相沢の姓を名乗り、相沢家の娘としてそだつた。相沢久次郎と云うのが養父であつたが、土木事業で大連だいらんに渡つて行き、きんが小学校の頃から、この養父は大連へ行きっぱなしで消息はないのである。養母のりつは仲々の理財家で、株をやつたり借家を建てたりして、その頃は牛込うしごめの藁店わらだなに住んでいたが、藁店の相沢と云えば、牛

込でも相当の金持ちとして見られていた。その頃神楽坂にかぐらぎかに辰井と云う古い足袋屋たびやがあつて、そこに、町子と云う美しい娘がいた。この足袋屋は人形町のみようが屋と同じように歴史のある家で、辰井の足袋と云えば、山の手の邸町やしきまちでも相当の信用があつたものである。紺の暖簾のれんを張つた広い店先きにミシンを置いて、桃も割もわれに結つた町子が、黒縹くろじゆす子の襟えりをかけてミシンを踏んでいるところは、早稲田わせだの学生達にも評判だつたとみえて、学生達が足袋をあつらえに来ては、チップを置いて行くものもあると云う風評だつたが、この町子より五ツ六ツも若いきんも、町内では美しい少女として評判だつた。神楽坂には二人の小町娘として人々に云いふらされていた。——きんが十九の頃、相沢の家も、合ごうひや

百<sup>く</sup>の鳥越と云う男が出入りするようになってから、家が何となくかたむき始め、養母のりつは酒乱のような癖がついて、長い事暗い生活が続いていたが、きんはふつとした冗談から鳥越に犯されてしまった。きんはその頃、やぶれかぶれな気持ちで家を飛び出して、赤坂の鈴木と云う家から芸者になって出た。辰井の町子は、丁度その頃、始めて出来た飛行機にふり袖姿で乗せて貰って洲崎<sup>すざき</sup>の原に墜落したと云う事が新聞種になり、相当評判をつくった。きんは、欣也<sup>きんや</sup>と云う名前で芸者に出たが、すぐ、講談雑誌なんか写真が載ったりして、しまいには、その頃流行のエハガキになったりしたものである。

いまから思えば、こうした事も、みんな遠い過去のことになっ

てしまったけれども、きんは自分が現在五十歳を過ぎた女だとはどうしても合点がゆかなかつた。長く生きて来たものだと思ふ時もあったが、また短い青春だつたと思ふ時もある。養母が亡くなつたあと、いくらもない家財は、きんの貰われて来たあとに生れたすみ子と云う義妹にあつさり継がれてしまつていたので、きんは養家に対して何の責任もない軀からだになつていた。

きんが田部を知つたのは、すみ子夫婦が戸塚に学生相手の玄人下宿をしている頃で、きんは、三年ばかり続いていた旦那だんなと別れて、すみ子の下宿に一部屋を借りて気楽に暮らしていた。太平洋戦争が始つた頃である。きんはすみ子の茶の間で行きあう学生の田部と知りあい、親子ほども年の違う田部と、何時か人目を忍ぶ仲

になつていた。五十歳のきんは、知らない人の目には三十七八位にしか見えない若々しきで、眉まゆの濃いのが匂うようであつた。大を卒業した田部はすぐ陸軍少尉で出征したのだけれども、田部の部隊はしばらく広島に駐在していた。きんは、田部を尋ねて二度ほど広島へ行つた。

広島へ着くなり、旅館へ軍服姿の田部が尋ねて来た。革臭い田部の体臭にきんはへきえきしながらも、二晩を田部と広島の旅館で暮した。はるばると遠い地を尋ねて、くたくたに疲れていたきんは、田部の逞たくましい力にほんろうされて、あの時は死ぬような思いだつたと人に告白して云つた。二度ほど田部を尋ねて広島に行き、その後田部から幾度電報が来ても、きんは広島へは行かな

かった。昭和十七年に田部はビルマへ行き、終戦の翌年の五月に復員して来た。すぐ上京して来て、田部は沼袋のきんの家を探ねて来たが、田部はひどく老けこんで、前歯の抜けているのを見たきんは昔の夢も消えて失望してしまった。田部は広島の子で、あつたが、長兄が代議士になったとかで、兄の世話で自動車会社を起して、東京で一年もたない間に、見違えるばかり立派な紳士になってきんの前に現われ、近々に細君を貰うのだと話した。それからまた一年あまり、きんは田部に逢う事もなかった。——きんは、空襲の激しい頃、捨て値同様の値段で、現在の沼袋の電話つきの家を買ひ、戸塚から沼袋へ疎開していた。戸塚とは眼と鼻の近さでありながら、沼袋のきんの家は残り、戸塚のすみ子の家

は焼けた。すみ子達が、きんのところへ逃げて来たけれども、きんは、終戦と同時にすみ子達を追い出してしまった。尤も追もつとい出されたすみ子も、戸塚の焼跡に早々と家を建てたので、かえつていまではきんに感謝している有様でもあった。今から思えば、終戦直後だったので、安い金で家を建てる事が出来たのである。

きんも熱海の別荘を売った。手取り三十万近い金がいると、その金でぼろ家を買っては手入れをして三、四倍には売った。きんは、金にあわてると云う事をしなかった。金銭と云うものは、あわてさえしなければすくすくと雪だるまのようにふくらんでくられる利徳のあるものだと云う事を長年の修業で心得ていた。高利よりは安い利まわりで固い担保を取って人にも貸した。戦争以来、

銀行をあまり信用しなくなつたきんは、なるべく金を外へまわした。農家のように家へ積んで置く愚もしなかつた。その使いにはすみ子の良人おつとの浩義を使った。幾割かの謝礼を払えば、人は小気味よく働いてくれるものだと言ふ事もきんは知つていた。女中との二人住いで、四間ばかりの家うちは、外見には淋しかつたのだけれども、きんは少しも淋しくもなかつたし、外出ぎらいであつてみれば、二人暮しを不自由とも思わなかつた。泥棒の要心には犬を飼う事よりも、戸締りを固くすると云う事を信用して、何処の家よりもきんの家は戸締りがよかつた。女中は唾おしなので、どんな男が尋ねて来ても他人に聞かれる心配はない。その癖きんは、時々、むごたらしい殺され方をしそうな自分の運命を時々空

想する時があつた。息を殺してひっそりと静まり返つた家と云うものを不安に思わないでもない。きんは、朝から晩までラジオをかける事を忘れなかつた。きんはその頃、千葉の松戸で花壇をつくつてゐる男と知りあつてゐた。熱海の別荘を買つた人の弟だとかで、戦争中はハノイで貿易の商社を起してゐただけけれども、終戦後引揚げて来て、兄の資本で松戸で花の栽培を始めた。年はまだ四十歳そこそこであつたが、頭髮が<sup>は</sup>つるりと禿げて、年よりは老けてみえた。板谷清次と云つた。二三度家の事できんを尋ねて来たけれども、板谷は何時の間にかきんの処へ週に一度は尋ねて来るようになっていた。板谷が来始めてから、きんの家は美しい花々の土産で賑<sup>にぎ</sup>わつた。——今日もカスタニアンと云う黄いろ

い薔薇ばらがざくりと床の間の花瓶かびんに差されている。銀杏いちようの葉、すこし零こぼれてなつかしき、薔薇の園生そのうの霜じめりかな。黄いろい薔薇は年増としまざかりの美しさを思わせた。誰かの歌にある。霜じめりした朝の薔薇の匂いが、つうんときんの胸に思い出を誘う。田部から電話がかかってみると、板谷よりも、きんは若い田部の方に惹ひかかっている事を悟る。広島では辛つらかったけれども、あの頃の田部は軍人であつたし、あの荒々しい若さも今になれば無理もなかつた事だどつまされて嬉しい思い出である。激しい思い出ほど、時がたてば何となくなつかしいものだ。——田部が尋ねて来たのは五時を大分過ぎてからであつたが、大きな包みをさげて来た。包みの中から、ウイスキーや、ハムや、チーズなどを出して、長な

がひばち  
火鉢

の前にどつかと坐った。もう昔の青年らしさはおもかげもない。灰色の格子こうしの背広に、黒っぽいグリンのズボンをはいているのは如何にもこの時代の機械屋さんと云った感じだった。「相変わらず綺麗だな」「そう、有難う。でも、もう駄目ね」「いや、うちの細君より色っぽい」「奥さまお若いンでしょう?」「若くても、田舎者いなかだよ」きんは、田部の銀の煙草ケースから一本煙草を抜いて火をつけて貰った。女中がウイスキーのグラスと、さっきのハムやチーズを盛りあわせた皿を持って来た。「いい娘だね……」田部がにやにや笑いながら云った。「ええ、でも唾なのよ」ほほうと云った表情で、田部はじいっと女中の姿をみつめていた。柔らかな眼もとで、女中は丁寧に田部に頭をさげた。きんは、ふっ

と、気にもかけなかった女中の若さが目障りめざわになった。「御円満なのでしよう？」田部はぷうと煙を吹きながら、ああ僕ンとこかいと云った顔で、「もう来月子供が生れるんだ」と云った。へえ、そうなのと、きんはウイスキーの瓶を持って、田部のグラスにすすめた。田部は美味うまそうにきゆうとグラスを空あけて、自分もきんのグラスにウイスキーをついでやった。「いい生活だな」「あら、どうして？」「外は嵐あらしがごうごうと吹き荒すさんでいるのにさ、君ばかりは何時までたつても変わらない……不思議な人だよ。どうせ、君の事だから、いいパトロンがいるんだろうけど、女はいいな」「それ、皮肉ですか？でも、私、別に、田部さんに、そんな風な事云われる程、貴方あなたに御厄介おこかけたって事ないわね？」「憤おこつ

たの？ そうじゃないんだよ。そうじゃないんだ。あんたは倅しあわせな人だつて云うんだよ。男の仕事つて辛いもんだから、つい、そんな事を云つたのさ。いまの世は、あだやおろそかには暮せない。喰くうか喰くわれるかだ。僕なんか、毎日ばくちをして暮しているよ。うなもんだからね」「だつて、景気はいいンでしょう？」「よかないさ……あぶない綱渡り、耳鳴りがする位辛い金を使っているんだぜ」きんは黙つてウイスキーをなめた。壁ぎわでこおろぎが啼ないているのがいやにしめつぽい。田部は、二杯目のウイスキーを飲むと、荒々しくきんの手を火鉢越しにつかんだ。指環をはめていない手が絹ハンカチのように頼りないほど柔い。きんは手の先きにある力をじつと抜いて、息を殺していた。力の抜けている

手は無性に冷たくてぼつてりと柔い。田部の酔った眼には、昔の様々が渦をなし心に迫つて来る。昔のままの美しきで女が坐つている。不思議な気がした。絶えず流れる歲月のなかに少しづつ経験が積み重なつてゆく。その流れのなかに、飛躍もあれば墜落もある。だが、昔の女は何の変化もなく太ふてぶて々しくそこに坐つている。田部はじいつときんの眼をみつめた。眼をかこむ小皺こしわも昔のままだ。輪郭も崩くずれてはいない。この女の生活の情態を知りたかつた。この女には社会的の反射は何の反応もなかつたのかもしれない。箆たんす笥すを飾り長火鉢を飾り、豪華に群生した薔薇の花も飾り、につこりと笑つて自分の前に坐つている。もう、すでに五十は越している筈はずなのに、匂におうばかりの女らしきである。田部はきんの

本当の年齢を知らなかった。アパート住いの田部は、二十五歳になつたばかりの細君のそそけた疲れた姿を<sup>まぶた</sup>瞼に浮べる。きんは火鉢のひき出しから、のべ銀の細い煙管<sup>きせる</sup>を出して、小さくなつた両切りをさして火をつけた。田部が、時々<sup>ひざがしら</sup>膝頭をぶるぶるとゆすぶっているのが、きんには気にかかった。金銭的に参っている事でもあるのかも知れないと、きんはじいつと田部の表情を観察した。広島へ行つた時のような一途<sup>いちず</sup>な思いはもうきんの心から薄れ去っている。二人の長い空白が、きんには現実に逢つてみるとちぐはぐな気がする。そうしたちぐはぐな思いが、きんにはもどかしく淋しかった。どうにも昔のように心が燃えてゆかないのだ。この男の肉体をよく知っていると云う事で、自分にはもうこの男

のすべてに魅力を失っているのかしらとも考える。雰囲ふんいき気はあつたにしても、かんじんの心が燃えてゆかないと云う事に、きんは焦あせりを覚える。「誰か、君の世話で、四十万ほど貸してくれる人ない?」「あら、お金のこと? 四十万なんて大金じゃないの?」「うん、いま、どうしても、それだけ欲しいんだよ。心当りはない?」「ないわ、第一、こんな無収入な暮しをしている私に、そんな相談をしたって無理じゃないの……」「そうかなア、うんと、利子をつけるが、どうだろう?」「駄目だめ! 私にそんな事おつしやつても無理よ」きんは、急に寒気だつような気がした。板谷との長閑のどかな間柄が恋いしくなつて来る。きんは、がっかりした気持ちで、しゅんしゅんと沸きたっているあられの鉄瓶てつびんを取つて茶

を淹いれた。「二十万位でもどうにかならない？ 恩にきるンだが  
なア……」 「おかしな人ね？ 私にお金のことをおっしゃったつ  
て、私にはお金のない事よく判わかっていらつしやるじやないの……。  
私がほしい位のものだわ。私に逢いたい為に来て下すつたンじや  
なく、お金の話で、私のそこへいらつしたの？」 「いや、君に逢  
いたい為さ、そりやア逢いたい為だけど、君になら、何でも相談  
が出来ると思つたからなんだよ」 「お兄様に相談なさればいいの  
よ」 「兄貴には話せない金なんだ」 きんは返事もしないで、ふつ  
と、自分の若さも、もうあと一二年だなと思う。昔の焼きつくよ  
うな二人の恋が、いまになつてみると、お互いの上に何の影響も  
なかつた事に気がついて来る。あれは恋ではなく、強く惹ひきあう

雌雄だけのつながりだったのかも知れない。風に漂う落葉のよう  
なもろい男女のつながりだけで、ここに坐っている自分と田部は、  
只、何でもない知人のつながりとしてだけのものになっている。  
きんの胸に冷やかなものが流れて来た。田部は思いついたように、  
にやりとして、「泊ってもいい？」と小さい声で、茶を呑んでい  
るきんに尋ねた。きんは吃驚した眼をして、「駄目よ。こんな  
私をからかわないで下さい」と、眼尻の皺をわざとちぢめるよう  
にして笑った。美しい皓い入れ歯が光る。「いやに冷酷無情だな。  
もう、一切金の話はしない。一寸、昔のきんさんに甘ったれたん  
だ。でも、——ここは別世界だものね。君は悪運の強い人だよ。  
どんな事があつたつてくたばらないのは偉い。いまの若い女なん

か、そりやアみじめだからね。君、ダンスはしないの？」きんは、ふふんと鼻の奥でわらった。若い女がどうだつて云うんだろう：  
：。私の知った事じゃないわ。「ダンスなんて知らないわ。貴方あなたなさるの？」「少しはね」「そう、いい方があるンでしょう？  
それでお金があるンじゃないの？」「馬鹿だなア、女にみつぐ程、ぼろい金もうけはしていない」「あら、でも、とても、その身だしなみは紳士じゃないのよ。相当なお仕事でなくちや、出来ない芸だわ」「これははったりなんだ。ふところはびいびいなんだぜ。  
七ななころ転やび八お起おきもこの頃はあわただしくてね……」きんはふふふとふくみ笑いをして、田部の房々とした黒髪にみとれている。まだ、十分房房として額ぎわにたれている。角帽の頃の匂う水々し

さは失せているけれども、頬のあたりがもう中年の仇めかしさを漂わせて、品のいい表情はないながらも、逞ましい何かがある。猛獣が遠くから匂いを嗅ぎあつていような観察のしかたで、きんは、田部にも茶を淹れてやった。「ねえ、近いうちにお金の切りさげつてあるつて本当なの？」きんは冗談めかして尋ねた。

「心配するほど持つてるんだな？」「まア！　すぐ、それだから、貴方つて変つたわね。そんな風評を人がしてるからなのよ」「さア、そんな無理なことはいまの日本じゃ出来ないだろうね。金のないものには、まず、そんな心配はないさ」「本当ね……」きんはいそいそとウイスキーの瓶を田部のグラスに差した。「ああ、箱根かどつか静かなところへ行きたいな。二三日そんな処でぐつ

すり寝てみたい」「疲れてるの」「うん、金の心配でね」「でも、金の心配なんて貴方らしくていいじゃありませんの？ なまじ、女の心配じゃないだけ……」田部は、きんの取り澄しているのが憎々しかった。上等の古物を見ているようでおかしくもある。一緒に一夜を過したところで、ほどこしをしてやるようなものだと、田部は、きんのあごのあたりを見つめた。しつかりしたあごの線が意志の強さを現わしている。さつき見た唾おしの女中の水々しい若さが妙に醜にだぶって来た。美しい女ではないが、若いと云う事が、女に眼の肥えて来た田部には新鮮であった。なまじ、この出逢いが始めてならば、こうしたもどかしさもないのではないかと、田部は、さつきよりも疲れの見えて来たきんの顔に老いを感じる。

きんは何かを察したのか、きつと立ちあがって、隣室に行くと、鏡台の前に行き、ホルモンの注射器を取って、ずぶりと腕に射した。肌を脱脂綿できつくこすりながら、鏡のなかをのぞいて、パフで鼻の上をおさえた。色めきたつ思いのない男女が、こうしたつまらない出逢いをしていると云う事に、きんは口惜くやしくなつて来て、思いがけもしない通り魔のような涙を瞼に浮べた。板谷だつたら、膝に泣き伏すことも出来る。甘えることも出来る。長火鉢の前にいる田部が、好きなのかきらいなのか少しも判らないのだ。帰って貰いたくもあり、もう少し、何かを相手の心に残したい焦あせりもある。田部の眼は、自分と別れて以来、沢山の女を見て来ているのだ。廁かわやへ立って、帰り、女中部屋を一寸のぞくと、き

ぬは、新聞紙の型紙をつくつて、洋裁の勉強を一生懸命にしていた。大きなお尻をぺったりと畳につけて、かがみ込むようにして鉢はさみをつかつている。きつちり巻いた髪の毛の襟元が、艶つやつや々と白くて、見惚みとれるようにたつぷりとした肉づきであつた。きんは、そのまままた長火鉢の前へ戻つた。田部は寝転んでいた。きんは茶筴ちやだん筒すの上のラジオをかけた。思いがけない大きい響きで第九が流れ出した。田部はむつくりと起きた。そしてまたウイスキーのグラスを唇につける。「君と、柴しばまた又またの川かわじん甚じんへ行つた事があつたね。えらい雨に降りこめられて、飯のない鰻うなぎを食つた事があつたなア」「ええ、そんな事あつたわね、あの頃はもう、食べ物がないでも不自由な時だつたわ。貴方が兵隊さんになる前よ。床の間に

赤い鹿かの子百合こゆりが咲いててさア、二人で、花瓶を引っくり返した  
こと覚えている？」「そんな事あったね……」きんの顔が急にふ  
くらみ、若々しく表情が変った。「何時かまた行こうか？」「え  
え、そうね、でももう、私、おつくうだわ……もう、あそこも、  
何でも食べさせるようになってるでしょうね？」きんは、さつき  
泣いた感傷を消さないように、そつと、昔の思い出をたぐりよせ  
ようと努力している。そのくせ、田部とは違う男の顔が心に浮ぶ。  
田部と柴又に行つたあと、終戦直後に、山崎と云う男と一度、柴  
又へ行つた記憶がある。山崎はつい先せん達だつて胃の手術で死んでし  
まった。晩夏でむし暑い日の江戸川べりの川甚の薄暗い部屋の景  
色が浮んで来る。こつとん、こつとん、水揚げをしている自動ポ

ンプの音が耳についていた。カナカナが鳴きたてて、窓べの高い江戸川堤の上を買い出しの自転車が競走のように銀輪を光らせて走っていたものだ。山崎とは二度目のあいびきであったが、女に初心うぶな山崎の若さが、きんにはしみじみと神聖に感じられた。食べ物も豊富だったし、終戦のあとの気の抜けた世相が、案外真空の中にいるように静かだった。帰りは夜で、新小岩へ広い軍道路をバスで戻ったのを覚えている。「あれから、面白い人にめぐりあった?」「私?」「うん……」「面白い人って、貴方以外に何もありますんわ」「嘘うそつけ!」「あら、どうして? そうじゃないの? こんな私を、誰が相手にするものですか……」「信用しない」「そう……でも、私、これから咲き出すつもり、生きてい

る甲斐かひにね」「まだ、相当長生きだろうからね」「ええ、長生きをして、ぼろぼろに老いさらばえるまで……」「浮気はやめない？」「まあ、貴方あなたつて云うひとは、昔の純なとこ少しもなくなつたわね。どうして、そんな厭いやなことを云う人になつたンでしょう？」昔の貴方は綺麗きれいだつたわ」田部は、きんの銀の煙管たばこを取つて吸つてみた。じゅつと苦味にがいやにが舌しほに来る。田部はハンカチを出して、べつとやにを吐いた。「掃除しないからつまつてるのよ」きんは笑いながら、煙管を取りあげて、散り紙の上に小刻みに強く振った。田部は、きんの生活を不思議に考える。世相の残酷さが何一つ跡をとどめてはいないと云う事だ。二三十万の金は何とか都合のつきそうな暮しむきだ。田部はきんの肉体に対しては何

の未練もなかったが、この暮しの底にかくれている女の生活の豊かさに追いつがる気持ちだった。戦争から戻って、只の血気だけで商売をしてみたが、兄からの資本は半年たらずですっかり使い果していたし、細君以外の女にもかかわりがあつて、その女にもやがて子供が出来るのだ。昔のきんを思い出して、もしやと云う気持ちできんの処へ来たのだけれども、きんは、昔のような一途いちぢずのところはなくなつていて、いやに分別を心得ていた。田部との久々の出逢いにも一向に燃えては来なかつた。軀を崩くずさない、きちんとした表情が、田部には仲々近寄りがたいのである。もう一度、田部はきんの手を取つて固く握つてみた。きんはされるままになつてゐるだけである。火鉢に乗り出して来るでもなく、片手

で煙管のやにを取っている。

長い歳月に晒<sup>さ</sup>らされたと云う事が、複雑な感情をお互いの胸の中にたたみこんでしまった。昔のあのなつかしさはもう二度と再び戻っては来ないほど、二人とも並行して年を取って来たのだ。二人は黙ったまま現在を比較しあっている。幻滅の輪の中に沈み込んでしまっている。二人は複雑な疲れ方で逢っているのだ。小説的な偶然はこの現実にはみじんもない。小説の方がはるかに甘いのかも知れない。微妙な人生の真実。二人はお互いをここで拒絶しあう為に逢っているに過ぎない。田部は、きんを殺してしまふ事も空想した。だが、こんな女でも殺したとなると罪になるのだと思うと妙な気がした。誰からも注意されない女を一人や二人

殺したところで、それが何だろうと思ひながらも、それが罪人になつてしまふ結果の事を考えると馬鹿々々しくなつて来るのだ。たかが虫けら同然の老女ではないかと思ひながらも、この女は何事にも動じないでここに生きて居るのだ。二つの箆笥の中には、五十年かけてつくつた着物がぎつしりと這入つて居るに違ひない。昔、ミツシエルとか云つた仏蘭西人に贈られた腕環を見せられた事があつたけれども、あゝした宝石類も持つて居るに違ひない。この家も彼女のものであるにきまつて居る。唾の女中を置いて居る女の一人位を殺したところで大した事はあるまいと空想を逞しくしながらも、田部は、この女に思いつめて、戦争最中あいびきを続けていた学生時代の、この思い出が息苦しく生鮮を放つて来

る。酒の酔いがまわったせいか、眼の前にいるきんのおもかげが自分の皮膚の中に妙にしびれ込んで来る。手を触れる気もないくせに、きんとの昔が量感を持つて心に影をつくる。

きんは立つて、押入れの中から、田部の学生時代の写真を一枚出して来た。「ほほう、妙なものを持っているんだね」「ええ、

すみ子のところにあつたのよ。貰つて来たの、これ、私と逢う前

の頃のね。この頃の貴方つて貴公子みたいよ。紺飛こんがすり白でいいじ

やない？ 持つていらつしやいよ。奥さまにお見せになるといい

わ。綺麗ね。いやらしい事を云うひとには見えませんね」「こん

な時代もあつたんだね？」「ええ、そうよ。このままですすすすく

とそだつて行つたら、田部さんは大したものだったのね？」「じ

やア、すすくとそだたなかつたつて云うの？」「ええ、そう」  
「そりやア、君のせいだし、長い戦争もあつたしね」「あら、そんな事、こじつだけだわ。そんな事は原因にならなくてよ。貴方つて、とても俗になつちやつた……」「へえ……俗にね。これが人間なんだよ」「でも、長い事、この写真を持ち歩いてきた私の純情もいいじゃアないの？」「多少は思い出もンだろうからね。僕にはくれなかつたね？」「私の写真？」「うん」「写真は怖こわいわ。でも、昔の私の芸者時代の写真、戦地に送つて上げたでしよう？」  
「どつかへおつことしちやつたなア……」「それごらんなさい。私の方が、ずっと純だわ」

長火鉢のとりでは、仲々崩れそうにもない。田部は、もうすつ

かり酔っぱらってしまった。きんの前にあるグラスは、始めの一杯をついだままのが、まだ半分以上も残っている。田部は冷い茶を一気に呑んで、自分の写真を興味もなく横板の上に置いた。

「電車、大丈夫？」 「帰れやしないよ。このまま酔っぱらいを追い出すのかい」 「ええ、そう、ほいと放り出しちゃうわ。ここは女の家で、近所がうるさいですからね」 「近所？ へえ、そんなもの君が気にするとは思わないな」 「気にします」 「旦那が来るの？」 「まア！ 厭な田部さん、私、ぞつとしてしまつてよ。そんなこと云う貴方つてきらいツ！」 「いいさ、金が出来なきや、二三日帰れないんだ。ここへ置いて貰うかな……」 きんは、両手で頼杖ほおづえをついて、じいっと大きい眼を見はつて田部の白っぽい

唇を見た。百年の恋もさめ果てるのだ。黙って、眼の前にいる男を吟味している。昔のような、心のいろどりはもうお互いに消えてしまっている。青年期にあつた男の恥じらいが少しもないのだ。金一封を出して戻ってもらいたい位だ。だが、きんは、眼の前にだらしなく酔っている男に一銭の金も出すのは厭であつた。初ういう々しい男に出してやる方がまだましである。自尊心のない男ほど厭なものはない。自分に血道をあげて来た男の初々しさをきんは幾度も経験していた。きんは、そうした男の初々しさに惹ひかれていたし、高尚なものにも思っていた。理想的な相手を選ぶ事以外に彼女の興味はない。きんは、心の中で、田部をつまらぬ男になりさがったものだと思つた。戦死もしないで戻つて来た運の強

さが、きんには運命を感じさせる。広島まで田部を追って行った、あの時の苦勞だけで、もうこの男とは幕にすべきだったと思うのだった。「何をじろじろ人の顔見てるんだ？」「あら、あなただつて、さつきから、私をじろじろ見てて何かいい気な事考えていたでしょう？」「いや、何時いつ逢つても美しいきんさんだと見惚みとれていたのさ……」「そう、私も、そうなの。田部さんは立派になつたと思つて……」「逆説だね」田部は、人殺しの空想をしていたのだと口まで出かけているのをぐつとおさえて、逆説だねと逃げた。「貴方はこれから男ざかりだから愉しみだわね」「君もまだまだじゃないの？」「私？ 私はもう駄目。このまましぼんでゆくきり、二三年したら、田舎へ行つて暮したいのよ」「ぼろぼ

ろになるまで長生きして、浮気するつて云つたのは嘘うそ？」「あら、そんな事、私云いませんよ。私つて、思い出に生きてる女なのよ。只、それだけ。いいお友達になりましたよね」「逃げてるね。女学生みたいな事を云いなさんなよ。ええ。思い出だのつてものはどうでもいいな」「そうかしら……だつて、柴又へ行つたの云い出したの貴方よ」田部はまた膝をぶるぶるとせつかちにゆすぶつた。金が慾しい。金。何とかして、只、五万円でも、きんに借りたいのだ。「本当に都合つかないかねえ？店を担保に置いても駄目？」「あら、また、お金の話？ そんな事を私におつしやつても駄目よ。私、一銭もないのよ。そんなお金持ちも知らないし、あるようでないのが金じゃないの。私、貴方に借りたい位だわ：

…「そりやアうまくゆけば、うんと君に持って来るさ。君は、忘れられない人だもの、…」 「もう沢山よ、そんなおせじは： お金の話しないって云ったでしょう？」 わあつと四囲あたりいちめん水っぽい秋の夜風が吹きまくるようで、田部は、長火鉢の火箸ひぼしを握った。一瞬、凄まじい怒りが眉まゆのあたりに這はう。謎なぞのように誘惑される一つの影に向って、田部は火箸を固く握った。雷光のようなどろきが動悸どうきを打つ。その動悸に刺戟しげきされる。きんは何とない不安な眼で田部の手元をみつめた。いつか、こんな場面が自分の周囲にあったような二重写しを見るような気がした。「貴方、酔ってるのね、泊って行くといいわ…」 田部は泊って行くといと云われて、ふっと火箸を持った手を離した。ひどく酩酊めいていし

たかつこうで、田部はよろめきながら厠へ立つて行つた。きんは田部の後姿に予感を受け取り、心のうちでふふんと軽蔑けいべつしてやる。この戦争ですべての人間の心の環境ががらりと変つたのだ。きんは、茶ちや棚だなからヒロポンの粒を出して素早く飲んだ。ウイスキーはまだ三分の一は残っている。これをみんな飲ませて、泥のように眠らせて、明日は追い返してやる。自分だけは眠つていられないのだ。よく熾おこつた火鉢の青い炎の上に、田部の若かりし頃の写真をくべた。もうもうと煙が立ちのぼる。物の焼ける匂いが四囲にこもる。女中のきぬがそつと開いている襖ふすまからのぞいた。きんは笑いながら手真似てまねで、客間に蒲団ふとんを敷くように云いつけた。紙の焼ける匂いを消す為に、きんは薄く切つたチーズの一切れを

火にくべた。「わア、何焼いてるの」厠から戻って来た田部が女中の豊かな肩に手をかけて襖からのぞき込んだ。「チーズを焼いて食べたらどんな味かと思つて、火箸でつまんだら火におつことしちまつたのよ」白い煙の中に、まつすぐな黒い煙がすつと立ちのぼっている。電気の円い硝子ガラスがさ笠が、雲の中に浮いた月のように見えた。あぶらの焼ける匂いが鼻につく。きんは、煙にむせて、四囲の障子や襖を荒々しく開けてまわつた。



# 青空文庫情報

底本：「林芙美子傑作集（一）」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年7月15日発行

1969（昭和44）年3月5日第32刷改版

1969（昭和44）年10月30日第33刷

初出：「別冊文藝春秋」文藝春秋

1948（昭和23）年11月

入力：金子南

校正：中島瑠香

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 晩菊

林芙美子

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>